キレたら止まらない女と勇者と魔王とか

明星あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キレたら止まらない女と勇者と魔王とか

【Ｎコード】
Ｎ０５７４Ｚ

【作者名】
明星あかり

【あらすじ】
小説などでよくある異世界トリップ物語。
だいたいが何かしらのために召還されたり、神様のミスで死んでしまってその償いにチート転生したりといった話だ。

しかし、私は違った。
間違えて時空の隙間に足を取られて…気がついたらわけの分からない世界にいた。
しかもあれだ。王宮の中とかじゃなくどっかの路地裏にだ。

そこで運よく心優しい老夫婦に拾ってもらってこれまでなんとか生きていけたが、異世界トリップのテンプレである「何故か日本語が通じる」といったこともなく、まともに人と話ができるようになるのに2年かかった。

そして3年目の今。

実は世界を救う巫女だった！とか
王宮から迎えが！とか
魔王にさらわれるとかいった王道イベントは起こらず、それはもう平和に過ごしている。

そんな中、私の街に勇者一行がやって来た・・・

※割と適当に書いてます。なにか読みにくかったり誤字脱字があってもそれは愛嬌ということでよろしくおねがいします（オイ

小説などでよくある異世界トリップ物語。
だいたいが何かしらのために召還されたり、神様のミスで死んでしまってその償いにチート転生したりといった話だ。

しかし、私は違った。
間違えて時空の隙間に足を取られて…気がついたらわけの分からない世界にいた。
しかもあれだ。王宮の中とかじゃなくどっかの路地裏にだ。

そこで運よく心優しい老夫婦に拾ってもらってこれまでなんとか生きていけたが、異世界トリップのテンプレである「何故か日本語が通じる」といったこともなく、まともに人と話ができるようになるのに2年かかった。

そして3年目の今。

実は世界を救う巫女だった！とか
王宮から迎えが！とか
魔王にさらわれるとかいった王道イベントは起こらず、それはもう平和に過ごしている。

いいね！テストがないって！！
何を隠そう前の世界では女子高生だった私ですから？
テストない！課題がない！！＝天国
なわけですよ。

そりゃあ私にも少なからず友達や親兄弟がいたので、最初のころは

泣いて泣いて過ごした。
でも、途中から慣れたっていうかなんていうか…。
昔からやたらとなじむのが早くて要領がよかったので、それもあったのだろうが…。
もうこっちの世界の住人ってことでいっか！
という変なあきらめがついてしまった。
いや、みんなに会えないのは寂しいけどさ！！
寂しいばっかり行ってても話進まないじゃん！！時間もったいないじゃん！！時間を有効に使おうよ！！人生短いんだよ！？

そんなこんなで長い前置きになってしまったが、こちらの世界に来て3年が経ち、ただいま私は１９歳。
もうこっちでは１８歳から成人ということで、立派な大人扱いを受けている。
つまりは、労働をしないといけないわけだ。
子供ではないので、親に束縛されないかわりに自分に責任を持たないといけないのだ。
ふふふ。今思えばうざったるいと思っていた親の行動は私を守ってくれていたのだと思うとありがたい限りだ。お母さん、「しわくちゃクソババア」とか言ってごめんね。という念を異世界の母に向かって飛ばしてみる。
…届いたと思っておこう。

今日も私は手先の器用さを生かしてレースを編む。
このレースを販売するのが私の仕事だ。ちなみに糸から自分で作っている、完全ハンドメイドだ。
庭でコットンを栽培し、それを紡いで糸にしてからレースを編む。
オーガニックコットンってやつですよ。

今日はとても天気がいいから外で編む。

青い空の下、木陰でレースを編む…
これが私じゃなくてどこぞの深淵の令嬢だったら絵になるんだけどなあ。

そんな時、町の方が騒がしいと思って近所のニック（１６歳♂）に話を聞くと、どうやら勇者が訪れているらしい。

「い、いっしょに見に行かないかい？」

と、モジモジしながら聞かれたが

「野次馬しに行く趣味はないから行かない」

と言うとしょげてトボトボと去って行った。
大方、私に好意を持っているのだろうが、こっちのは全くその気はないのですっぱり断る。
あまり期待させるのも悪いしね。

とは言え、勇者か…勇者ねえ。
変な王道フラグとか立たないよね？
勇者さまに見初められる村人Ａとか言わないよね…？
まあ私の容姿ではそんなことは間違ってもないだろうけど。

「リリちゃ～ん！！」

「ぎゃあ！！」

後ろからいきなり抱きついてきたのはお隣さんの家のミネルバ（１８歳♀）だ。
あ、リリって私の名前ね。本当は理利子っていうんだけど。こっち

の人にはリリって呼んでもらってる。異世界で生きて行くと決めた時から、理利子はやめることにした。
まあ私の決意の現れだと思ってくれるとありがたい。

「リリちゃんリリちゃん！！勇者さまだって！！見に行こうよ！！」

「分かった分かった！！分かったからとりあえず落ち着こうか！！」

ニックに誘われても行かないけどミネルバに誘われたら行くっていうね。
だってミネルバったらめちゃくちゃかわいいんだよ！！
金髪碧眼で色白でたれ目でピンクの唇とか！！もうお人形さんか！！ってつっこみたくなるってもんでしょ。
ああ、こんなにかわいくて優しくて人懐っこいとかもうどんだけかわいい要素詰め込んだらいいんだ。
神は二物を与えずって言ったやつだれだ。出てこい。

「勇者さまってね？金髪で紫の瞳がすっごくかっこよくて強くて紳士的なんですって！！」

「へぇー、そうなんだ」

「しかもね！お供の魔術師様も紫の髪と黒い瞳が神秘的でものすごいイケメンらしくてね！？」

「ふーん」

「巫女さまもシルバーブロンドに青い瞳でそれはもう美しいらしいの！」

「ほうほう」

「これはもう見に行くしかないよね！！眼福だよ！！人生そうそう美形に出会う機会なんてないんだから！」

「そうだね」

言っておくが、私は興味は無い。
でもミネルバがかわいいから仕方なくついて行くことにする。
いやあ、はしゃぐミネルバもかわいいなあ。

〜〜町にて〜〜

「きゃああ！！見て見て！！勇者さまよ！！！噂に違わずイケメン！！！」

「……へぇ」

驚くことに、勇者は本当にイケメンだった。
大方、噂が一人歩きしてものすごい美談になっただけだと思っていたので、本当に驚いた。
しかもお供の魔術師と巫女も噂のとおりの美人さんである。
たまには噂を信じてみるのも悪くないかもしれないなあ。

そのとき、魔術師が闇のように黒い瞳をこちらに向けてピシリと固まった。
あ、やばいミネルバが魔術師に見初められるパターンじゃないでし

ょうか？
スタスタとこちらに歩いて来る魔術師。
やっぱりね！やっぱりね！！そんな気はしてたのさ！
だってミネルバかわいいんだもん！！

「一目惚れしました。俺と付き合ってください」

「えっ！？」

ほらな、やっぱりな。
魔術師はミネルバの目の前で跪いて手をとり、甲にキスをする。
なんてキザなやつなんだ。どうしよう。鳥肌がとまらない。

「デュース！！俺という者がありながら！！…この、浮気男！！」

「誰がいつ何処でお前を受け入れたんだ！！勝手なことを言うな！！！」

ポカーン…

その場のみんながあんぐり口を開けて固まる。
そう、この恋人の修羅場のような会話を繰り広げているのは勇者と魔術師…
つまりは……

勇者は同性愛者だったのだ。

「デュースの馬鹿野郎！！」

「あ！おい！！アイオン！！」

「あーはいはい。ほっときましょうよ。どうせすぐ帰ってきますよ」

「しかし…あいつはあれでも勇者だぞ？魔物に襲われたらどうする？」

「あれでも勇者ですから大丈夫でしょう。死にはしませんよ」

…あれでもて！！魔術師も巫女もなにげに口悪いな！！

てか本当に大丈夫か？勇者走ってどっかいっちゃったけど…もう影も形も見えないけど…足早いな。さすがは勇者というべきか？

とかなんとか言ってるうちに、ミネルバを口説き始める魔術師。勇者の心配はもういいのかよ！

ああ！！ミネルバ！困った顔もかわいいな！！いくらミネルバがかわいくてしかたなくても、さすがに色恋には首はつっこめないので傍観するしかない。

あ、ミネルバ照れてる。まんざらでもないカンジなんじゃないの！？ニヤニヤがとまらないよ！！

「リ、リリちゃん！」

「はいはい、なにかな？（ニヤニヤ）」

「もう！ニヤニヤしないでよ！！」

「ウフフフ…」

「もー！…あのね？このあと一緒にお茶でもって言ってくださってるんだけど、リリちゃんもどう？」

ちらりと魔術師の方を見る。

あーはいはい。着いてくんな邪魔すんなオーラがものすごいですねーてか巫女さまもうすでにどっか行っていないし！！はやっ！！勇者並みだな！！

…はあ。ミネルバを一人置いて行くのはちょっと不安だけど、これだけ人に囲まれてたら不埒なこともできないだろうから大丈夫だろう。

「いや、私はおいとまするよ。仕事もまだ残ってるし！」

「え、リリちゃ…」

「ではでは！！さらばなり！！」

オホホホホとわざとらしく笑いながら退散する。

あの魔術師ったらまだ付き合ってもないのにすでに独占欲丸出しだ

よ。めんどくさっ。まあでも、そのぶんミネルバのことも大切にしそうだし、いっか！！

〜〜自宅にて〜〜

「…あんた誰？」

「いや、この家の者ですけど」

何故か帰ってきたら勇者が両親（老夫婦）と自宅でお茶をしていた件について。

「え！この家若い女いたの！？」

「いちゃマズいんですか？」

「俺、若い女キライなんだよね」

「え、熟女趣味なんですか」

「なんでそうなる！？」

てか、自分の家に帰ってきて文句言われてもねえ？

一瞬、頭カチ割ってやろうか。とか思ったけどさ。困るってもんだよね。

「いやいや、知ってますよ！勇者様は同性あいｓｙ…ムゴッムググ

！！」

いきなり勇者に口を押さえられた。息しにくいっ！！

「ちょーっと娘さんかりまーす」

「ムグムグ！！むぅぅぅぅ！！」

勇者に引っ張られて庭まで運ばれる私。てか、息！！息しにくいから！！くるしい！！

「お前な！！変なこと大きな声で言うなよ！！誤解されたらどーすんだ！！」

「え、でもあの魔術師のことが好きなんじゃ…」

「違う！いや、違わないが…好きなのはデュースだからであって、普段は男に興味があるわけではないんだ！！」

「なんかややこしいですね。でも、要は同性愛者じゃないですか」

「ちーがーうっつってんだろうが！！」

「イタっ痛いですよ！！離してください！！」

頭をグワシっと掴まれて揺らされる。痛いし目が回る。

痛いって！！ちょっ、ちょっとほんとに、ちょ……

「〜〜〜離せっつってんだろぉぉぉぉがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

はい。私、実はキレやすいことで有名だったりします。

「さっきから、こっちは痛い痛いって言ってんでしょ！！いい加減のところでやめるって言う思考があんたには無いの！？あ？言ってみ？言ってみろや！！それともなに？勇者っていうのは嫌がってる相手に暴行する趣味があるやつらのことを言うわけ！？とんだサディストだな！あ？こら、なんとか言えよ？」

「…あ、いや、す…すまん」

「すまん？ごめん、聞き間違いじゃないよね？はい、もう一回言ってみ？『ご・め・ん・な・さ・い』でしょ？」

「…ご、ごめんなさい」

「えー？なになにー？聞こえなーい！もう一回大きな声で言ってもらえますぅ？」

「ごめんなさい！！」

「…ふん！分かればいいの！まあ、私にも悪いところはあったし…しつこく言ってごめんね？あんまり言われたくないことだったんでしょ？」

「い、いや……もういい…」

なぜか脱力する勇者。

そういえば、地球の友達も私と一回でも喧嘩した子は『もう二度と喧嘩したくない』って言ってたな…。

私のキレ方ってめんどくさいのかな？

…てか私、勇者にタメ口きいちゃってるけどこの人年上じゃなかったっけ！？

いやあああ！！失礼なことしちゃった！！どんなに嫌な人でも年上は人生の先輩だから敬うっていう信条があるのに！！

「え、えと、年上…ですよね？ごめんなさい。タメ口で話したりして…、それ以前にキレたりとか…ほんとに…失礼な事して…ごめんなさい…」

あ、だめだ。泣きそう。すごく悪いことしちゃったし。

というより、考えてみれば初対面の人にキレられて怒鳴られるとか年上年下云々の前にかなり失礼だし。

ああ、この考えなしなところ、昔から全然成長できてないし！！

大人失格だ…。（泣）

「いや、そんな泣くこともないだろ！？俺が悪かったのは確かなんだし…」

「でも、初対面なのに…いきなり怒鳴ったりしたし…」

「俺が失礼なことを言ったのが悪いだろ？そんなに泣くなよ…」

あ、すごいどうしたらいいか分からない顔してる…

そりゃ、いきなり目の前で人が泣き出したらそうなるよね。

よけい迷惑かけてちゃダメだ！！泣き止まなきゃ！！泣き止…めないし！！

くっ！！こうなったら…！！

「あ、ちょ！どうしたんだ！？」

「失礼しました！！」

最終手段は逃亡だ。

〜〜巫女ソフィア視点（3日後少し離れた街の酒場にて）〜〜

「…はあ」

「アイオン！このフライドチキンおいしいですね？」

「…そーだな」

「あ、次はポトフが来ましたよ！！おいしそうですね！！」

「…そーだな」

「あ、サラダどれぐらい食べます？取り分けてあげますよ？」

「…うん」

「アイオン？」

「……はあ」

おかしい。
こんなにデュースが近くに居るのに、アイオンの元気がないだなんて…
アイオンがこんな状態になったのはかれこれ3日前からだ。
いつものようにデュースと痴話喧嘩のようなものをして走り去って、帰ってきたらこの状態になっていた。
私たちから離れている間になにがあったんだろうか？

「…はあ」

それにしても、これだけ隣でため息をつかれたらこっちも疲れるってものだ。
そろそろデュースに慰めてもらって元気になってもらわないと！！
いつまでも勇者に覇気がないとパーティーとしてどうかと思うし…

「デュース！アイオンをどうにかしてください！！」

「嫌だ。俺には決まった人ができたんだ。いつまでもアイオンに付きまとわれたらこまるだろう」

「いやいや、それ以前に今は魔王討伐の旅の途中ですよ？そんな時に勇者があんな状態ではこれからの旅に支障がでます！！」

「…しかしだな、おれにはミネルバという人が…」

「大丈夫ですよ！ちょっと『大丈夫か？』って声をかけてくだされば それでいいんです」

「…それぐらいなら」

「ありがとうございます！！」

この魔術師のデュースは、この前立ち寄った街でたった1日留まっただけにもかかわらず恋人を作り、将来の約束までしてきた強者だ。なんでも、魔王討伐から帰ったら彼女の街で式を挙げるらしい。1日しかあったことのない恋人が、まだどれぐらいかかるかわからない旅から帰るのを待つだなんて…私にはできない。本当に彼女は待っていてくれるのだろうか？デュースは割と本気なようだが…

「おい、アイオン。大丈夫なのか？」

「…うん」

な！な！何が起こった！！！！？

これまでのアイオンなら『ありがとなデュース！！俺は元気だぞ！」ぐらいのことは言ってのけるのに！！
こ、これは、思ったより大変なことが起こっているのでは…！！

「おい、ソフィア。なにもならないぞ」

「ほ、本当ですね…なにかあったんでしょうか？」

「…この前の街に寄った時からおかしいと思ってはいたんだが…」

「あの街でなにかあったんでしょうか？？」

「…はっ！ま、まさか俺のミネルバのことをアイオンまで！？」

「それはないでしょう。アイオンが彼女と会ったのは一瞬ですよ？それに、おかしくなったのは、そのしばらく後です。普通に考えて一人で居るときに何かがあったとするのが妥当でしょう」

「そ、そうだな…よかった」

この魔術師はバカなのか…いや、色ボケか。と思いつつもアイオンの方に視線をむける。
…すると、アイオンがなにか呟いている。

「…会いたい」

これは…恋！？
ま、まさか、あのアイオンがデュース以外の誰かを思って悩ましげなため息をつく日が来るだなんて！

「おい、どうした？なにか分かったのか？」

どうやらこの魔術師は先ほどの呟きを聞いていなかったようだ。

「…どうやらアイオンのこの状態の原因は、恋のようです」

「…恋？アイオンがか？そうか…これで俺の気苦労が一つ減ったな…よかった」

いやいや、問題はそこじゃないでしょう！！
今心配すべきは、アイオンがこの状況で魔王討伐なんてできるのかということだろう。
こんな惚けた勇者なんてプチっと潰されてしまうに違いない。
どうしたものか…いっそのことそのお相手のお嬢さんが魔王に攫われでもしたらやる気になってくれるんだろうが……ダメダメ！！一応これでも神に仕える身にも関わらずとんでもないことを考えてしまった！

しかし、本当にどうしたものか…

そんなふうに悩む私と、ホッとしているデュースと惚けたアイオンの元にとんでもない情報が入って来たのはそれからすぐのことだった。

「娘のリリが！！リリが魔王に攫われたんです！！お願いします！！勇者さま！！リリを助けてください！！」

ガタッ！！

「なんだって！！！？」

勢いよく立ち上がり、机の上の飲み物がこぼれるが気がつかないアイオン。

おや？いつもはあまりデュースのこと以外で慌てたりしないのに…この反応はもしかして…

「リリさんってこの前のお宅の娘さんですよね！？おじいさん！！？」

「はい！そうです！！お願いです！！…たった一人の娘なんです！！どうか助けてください！！！！」

老体に鞭打ってこの長距離をやってきたのであろうご老人を気配りつつ、真っ青な顔になったアイオン。

ああ、やっぱり…その攫われた娘さんは、彼の思い人だ。

「今すぐ魔王討伐に向かうぞ！！」
そういうとさっさと荷物をまとめるアイオン。

というか…

本当に攫われるのかよ！！

〜〜そのころのリリ〜〜

「ちょっと！！あんたいきなり人のこと攫っときながら帰れってどういうこと！？」

「いや、お前が前に出て来るから間違えてつれて来てしまったんだ。家に帰れるんだから感謝こそされど怒られる覚えはないぞ！？」

「てか、魔王のくせして城に着くまで人違いに気がつかないってどういうこと！！？」

「空の上は高くて怖いだろうと思って顔を隠していたから分からなかったのだ！」

「それにしても髪の色とかで分かりそうなもんですけど？」

「気がつかなかったんだから仕方ないだろう！！」

「仕方ないですんだら警察いらないっつーの！！いい！？あんたは、私を連れて来ただからちゃんと責任もって家に帰すの！おわかり？？」

「何故、我がそのようなことをせねばならんのだ！！」

「はあ？ごめん。もう一回言ってもらえますぅ？今大人の言うことは思えないようなガキの言い訳みたいな台詞が聞こえたんですけど？責任の持てない大人なんて大人じゃなくてただのガキだとおもうんだよねー。口先だけで立派なことばっか言っちゃってさぁ？結局自分でやりたくなかったら放棄？？ふざけてんじゃねえって話よ？わかってんの？コレ、アンタの話なんだけど？」

「な！！な！この無礼者が！！」

「なに？言い返せないからって私を殺すつもり？大人げないにもほどがあるんですけど。そういうのをガキって言ってたんだけどなあ。ああ、ガキすぎて理解できなかったの？ごめーん！お姉さんちょっと難しいこと言い過ぎたかな？もっと分かりやすく言ってあげようか？」

「ふざけるな！！死ね！！！」

ズゴゴゴゴゴ！！！

巨大な火の玉が私に向かって迫りくる！！…が、何故か熱くない。

…え？なんで？私、異世界人って言っても魔法とか使えないはずなんですけど！？

「な、魔術の無効化だと！？」

「へ？」

え、魔術の無効化て！そのうち空から白いシスターさんとかふってくるんじゃないだらうな？

というより、よかったあああ！！死なずにすんだー！！

もー！キレたら止まらないこの性格ほんとどーにかしなきゃな！

こっちの世界に来てなんにも魔法とか使えないから、てっきり本当になにも能力がないのかと思ってたよ！神は見捨ててなかったのね！あああ！よかった！！マジでよかった！！

「くっ！お前…ただの娘ではないな！」

「いや、ただの娘ですけど」

あ、でも異世界から来たっていうのは普通の域には入らないか。

いや、それ以外はごく普通なはずなんだけど…

それは普通って言えるんだろうか？…ダメだ。なんか『普通』のドツボにはまってしまった。

「…たぶん普通の娘…かな？」

「我に聞くな！！結局どうなんだ！！」

「そんなこと私が知りたいぐらいだわ！！」

そんなこんなで不毛な言い合いをしていると…

「リリ！！！」

「うぎゃあああ！！」

いきなり後ろから抱きしめられる。
一瞬ミネルバかと思ったが、こんなところに居るわけがないし…と思って振り返ると、そこには胸板。
そしてすこし見上げてみると、金髪に紫色の瞳のやたらと整った顔…って勇者じゃね！？
なんでここに勇者が！？いや、魔王討伐中って言ってたからいてもおかしくはないんだけど…くるの早くね？
ここ、ラスボスのダンジョンだよね？まだここに来るのは早いんじゃ…
てか、どうやってここまで来たの！？攫われるときにかなり長時間運ばれて来たことから考えてもあの街からかなり遠いはず…しかも、勇者が街を出てからまだ3日しかたってないし、徒歩での移動だったっぽいし…え？マジでどうやって来たのさ？

「魔王！覚悟！！」

え！？

いきなりラスボス戦始めちゃうの！？

てか、強っ！！いきなり魔王吹っ飛ばされていきましたよ！？

え、それで起きてこないよ！？

死んじゃったの！？？

はやくね！？死んじゃうの！？え、さっきまで私と口論してたのに！？

そんな…そんなの…悲しいじゃんか！！

たとえ魔王でもさ、一回会った人が死んじゃったら…そんなの…悲しいよ！！

「え！？リリ！？？なんで泣いて…」

いつの間にか泣いていた私…

嫌だ！贅沢かもしれないけど、誰にも死んでほしくない！！

「まさか…我のために泣いてくれる者がいるとはな…」

「魔王！！生きてたの！？よかった…」

「リリ！？まさか…魔王のこと…」

「いや。それはないから」

うん。間違ってもそれだけはない。

たしかに魔王は黒髪に赤い瞳のイケメンさんだけど、イケメンだからって好きになるわけじゃない。

単になんか悲しかっただけだ。なんか、魔王とは友達になれそうな気がしたから。

「ふっ…リリ…といったか？お前のために生きてみるのも悪くない」

「いやいや、本気でそういうのやめて？普通に迷惑だから」

「そうだぞ魔王め！！リリは俺と結婚するんだ！！」

「いやいやいや！！てか私の名前なんで知ってんのさ！そして呼び捨てにすんな！抱きしめるな！顔近づけんな！！」

「その手を離せ勇者よ！リリは我のものだ！！」

「俺のだ！！」

「私は誰のものでもねーっつーの！！！！」

そして、そんな私達の騒ぎを見て、巫女と魔術師は各々こう思っていた。

「これは…しばらく世界は平和になりそうですね…」

「これでミネルバと結婚できる！」

そんな、

最後まで冷静な巫女と

色ボケした魔術師と

同性愛者疑惑の勇者と

ちょっと抜けてる魔王と

キレたら止まらない私のお話でした。

〜〜街に帰還後〜〜

リ「あああああ！！仕事が！！全然できてない！！今月のノルマがあああああ！！」

ア「それなら俺が手伝うぞ！！」

魔「なんの、我が全て片付けてやろう」

リ「…もう帰って」

ミ「リリちゃーん！結婚式いつがいいかなぁ？」

デ「式の日取りは俺が決める！お前はアイオンとイチャついてろ」

リ「ちょぉぉぉぉ！！イチャついてねぇぇぇぇ！！」

魔「そうだぞ、リリは我とイチャついているのだ」

ア「いいや！！俺とイチャついてんの！！」

魔「なんだと？」

ア「あ？やんのかこら？」

ソ「まあまあ、落ち着きましょう？ね？」

リ「は・や・く・か・え・れ！！」

（後書き）

実はこのあと、おじいさんがぎっくり腰になってたり、勇者がデュースへの思いについて悩んだりとか、リリがなんやかんやで勇者のこと好きになったり、魔王が社会復帰しようとしたりするという変な設定があります（笑）

あ、ちなみに、魔王が本当に攫おうとしていたのはミネルバでしたが、今は完璧にリリ一筋です。いつかソフィアとくっついたりとかしそうですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0574z/

キレたら止まらない女と勇者と魔王とか

2011年12月2日01時57分発行